

鶴田町議会議員

視察研修報告【総務文教常任委員会】

視察先 岡山県和気町・兵庫県神戸市
期 間 平成十九年三月二十二日～二十四日
参加者 松山明、北谷正則、當麻榮一 以上三人

今回の研修では、タンチョウの保護・増殖と防災・減災に関する取り組みについて視察してきましたので、その概要についてご報告いたします。

まず、タンチョウの保護・増殖に関する取り組みについてですが、わが町では「鶴と国際交流の町」をキャッチフレーズに鶴にこだわったまちづくりを進めており、平成六年からは鶴田町丹頂鶴自然公園においてタンチョウの飼育にも取り組んでいることから、北海道以外でタンチョウの里を目指している岡山県の取り組みはとても参考になるものと思い視察してきました。

タンチョウは、東アジアに生息する鶴の仲間で、体長約百四十センチメートルの日本で一番大きい鳥です。国の特別天然記念物に指定されており、現在、国内では北海道釧路地方を中心に約一千羽、世界中では二千五百から三千羽いるといわれています。

岡山県とタンチョウのかかわり

は古く、日本三名園として知られる岡山市の後楽園では約三百年前から十羽ほど飼育されています。現在、岡山県内では四か所でタンチョウが飼育されていますが、今回は全国屈指の飼育数を誇る和気町の岡山県自然保護センターを視察地として選定しました。

自然保護センターは、県が自然環境学習と自然に関する調査・研究を進める機関として、平成三年に岡山県中部の里山に造られ、約百ヘクタールの敷地内には、タンチョウ飼育施設を始め、湿生植物園や野鳥などの観察施設があります。四季を通じていろんな動植物を観察できるほか、自然観察会や研修会などのプログラムも充実しています。また、絶滅が心配される希少種の保護保全にも取り組んでおり、中でもタンチョウにかかわるさまざまな取り組みは高く評価されています。

タンチョウ飼育施設は、センターの豊かな環境をタンチョウの増殖や育成に生かすために造られ、

広い敷地を確保するとともに、タンチョウのすみよい自然環境に近づけられています。平成三年の開設計時に、後楽園から九羽のタンチョウを移動させ、平成四年には世界的にも珍しいタンチョウの人工受精、人工ふ化によるひなを誕生させるなど、保護・増殖に努めた結果、現在の飼育数は五十羽を数えるまでになりました。

また、岡山県総社市を流れる川の中州にタンチョウを放鳥し、自然環境の中でたくましく生きることでできるタンチョウを育てるための野外飼育を行うとともに、その行動やタンチョウ同士のかかわり方などについての野外調査を行っています。これには次のような大きな意義があります。

一つ目は、種の保存です。日本のタンチョウは、遺伝的な系統の少なさや病気に対する抵抗性の低さが問題となっており、種存続の危険性が指摘されています。センターは、全国屈指の飼育数と保護・増殖技術を有しており、種の

保存を図る上で最適な条件を備えています。また、北海道東部のようなタンチョウが多くすんでいるところに伝染病などが発生すると絶滅してしまう危険性もあるため、岡山県においてタンチョウを飼育することは、危険を分散させる観点からも大きな意味をもっています。

二つ目は、環境学習です。これまでに行ってきた野外調査では、野外飼育の現場を活用し、子どもたちがタンチョウと自然環境のつながりを目で見て学習しています。また、大人も地域住民やボランティアの人たちが調査地の清掃や草刈り作業を行うなど、自然環境を大切にする意識が高まっており、環境学習の面で大きな成果が得られています。

主任研究員の井口萬喜男さんは、「鶴になったおじさん」で知られる釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長の高橋良治さんの弟子であり、後楽園での勤務を始めタンチョウの飼育にかかわってから約三十年



△岡山県自然保護センターでは、約50羽のタンチョウが広い敷地内でのびのびと生活。環境学習の場としても役立っています。

も経つそうです。井口さんたちのこれまでの実績により、本来はできないタンチョウの放鳥も岡山県の場合は特別に認められています。タンチョウの放鳥は、通常何回も訓練してから行いますが、つがいの場合は訓練していなくても二羽のうち一羽だけを放鳥すれば、必ずもう一羽のいる元の場合に戻ってくるということで、一度つがいになれば死ぬまで離れないと言われるほどタンチョウは夫婦愛が強いそうです。また、比較的低空飛行をする鳥なので、センターがある山手の場所よりも津軽平野のような平坦なところのほうが適していると言います。さらに、タンチョウが空を舞う姿はとても優雅で、特に六羽ぐらいが横に並

視察研修報告…岡山県・兵庫県

んで飛ぶ姿はとても絵になりますよと笑顔で話していました。

センターでは、これからも各飼育施設と連携してタンチョウ飼育にかかわるさまざまな技術の確立や調査研究に努めるとともに、地域住民の理解と協力を得ながら人間とタンチョウが安心して生活できる環境づくりに取り組んでいくこととしています。

このような取り組みは、わが町でも大いに参考になるものであり、学ぶことが多いように思われました。また、将来わが町でもタンチョウが空を舞う姿をぜひ見たいと思うようになりました。

次に、防災・減災に関する取り組みについて視察するため、兵庫県神戸市を訪れました。

平成七年一月十七日未明に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は、兵庫県の淡路島北部を震源とし、強烈な横揺れと縦揺れにより一部地域では観測史上最高の震度七を記録した都市直下型地震で、兵庫県をはじめとする各地に被害をもたらし、中でも近代的な大都市である神戸市は大きな被害を受けました。

全体の死者数は約六千四百人、負傷者約四万四千人であり、そのうち神戸市内の死者数は約四千六百人、負傷者は約一万五千人にのぼりました。また、倒壊や火災による建物の被害、交通ネットワークやライフラインの寸断などによ

って都市機能が低下し、復旧するまでの長い間、市民の生活にさまざまな影響を及ぼしました。産業面においては、神戸港が国際貿易港としての機能を失ったことにより、神戸だけでなく日本経済にも大きな影響を及ぼすこととなりました。

この震災では、被災者を支援するために全国から多くの人が駆けつけ、これをきっかけに日本国内におけるボランティア活動の認識が高まり、後に一月十七日は「防災とボランティアの日」と定められました。

まず、われわれは神戸港震災メモリアルパークへと向かいました。メモリアルパークは、神戸港メ



△震災で壊れた波止場がそのまま保存されていて、震災のすさまじさを見ることができる、神戸港震災メモリアルパーク。

リケン波止場付近を埋め立てて造られたメリケンパーク内にあり、震災で壊れた波止場の一部を約六十メートルにわたってそのままの状態で保存し、見学できるように整備した公園です。埋没した岸壁やあちこちに傾いた街灯などを見ると、震災のすさまじさを間近に感じとることができそうです。また、神戸港の被災状況や復旧の過程などを、模型や写真パネル、映像などで紹介する展示スペースもあり、震災で得た教訓を後世に伝えるということとは、とても大事なことであると思いました。

次に、同じ神戸市内にある阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」を訪ねました。

人と防災未来センターは、平成

十四年に国の支援を得て兵庫県が設置し、財団法人が運営を行っている施設であり、大震災の経験と教訓を生かして防災・減災に関するさまざまな取り組みを進めています。また、国連をはじめとした国内外のいろいろな防

災関係機関も入っており、世界的な防災研究の拠点としての役割も果たしています。センターは、「防災未来館」と「ひと未来館」の二つからなり、今回は防災未来館を視察しました。

まず、地震発生時の様子を迫力ある大型映像と音で伝える「1・17シアター」を見ましたが、地震により壊れていくビルや高速道路が崩れ落ちていく様子などが再現されており、実際には経験したくないものでありますが、疑似体験できたことはとても良い経験になりました。

「震災直後のまち」では、震災直後の破壊されたまち並みの様子を模型で再現しており、まるで映画の一場面のような感じで、実際にこういう状況であったとはとても信じがたいものでありました。

「大震災ホール」では、震災からの復興を目指す人々の姿や復旧していくまちの様子をドキュメンタリー映像で見ることができ、復旧に貢献した人たちの並々ならぬ努力や人間が持っている力のすこさを感じました。

また、震災関係の資料が提供者の体験談とともに展示されたコーナーや震災体験をビデオや語り部が生で語るコーナーでは、震災当時の状況などを詳しく知ることができます。そのほか、実験などによる子どもにもわかりやすい防災ワークショップや震災に関する資

料などを閲覧できるコーナーがあり、災害・防災に関する実践的な知識を身につけることができます。

このように、センターでは震災で得た経験や教訓を生かしてさまざまな方法で情報を発信することにより、防災の重要性や命の大切さなどを伝えるとともに、防災に関する研究を進め、被災社会の実現を目指しています。

防災・減災は、行政だけの問題ではありません。町民一人一人が防災に関する知識を身につけ、日頃から災害に対する備えをすることにより、被害を最小限に防ぐことができます。そして、町民と行政が協力して防災力を高めることによって、安全・安心な地域づくり、災害に強いまちづくりにつながると思います。機会があったら、皆さんにもぜひ一度見てもらいたい施設でありました。

われわれが研修を終えて帰ってきた翌日には、石川県で震度六強を記録した能登半島地震が発生し、身の引き締まる思いがしました。地震をはじめとする災害はいつ起こるかわかりません。万が一に備え、非常持ち出し品の準備や家庭内の家具を転倒防止のため固定するなど、できることから始めてみてはどうでしょうか。

以上、簡単ではありますが、今回視察してきました研修の報告とさせていただきます。